

# 鳥獣センタ－通信

## 特定外来生物アライグマ防除先進事例調査 (埼玉県さいたま市、川越市)

鳥獣センターでは、本県の鳥獣被害対策研修の講師としてお世話になっておられる埼玉県農業技術センター鳥獣害防除担当部長の古屋益朗氏に同行し、令和元年5月21日～22日に、アライグマ防除対策の先進県である埼玉県にて捕獲従事者養成研修などの事例調査を行いました。

### 1 埼玉県のアライグマ対策の取組

埼玉県では昭和57年に初めて自然環境下で生息が確認され、急速に数が増加。平成19年に「埼玉県アライグマ防除計画」を作成し、外来生物法に基づく捕獲従事者研修を実施し、捕獲従事者による防除を開始。

捕獲従事者研修は県、市町村が主催し、研修終了者を市町村が従事者として登録。捕獲頭数は年々増え続け、平成30年の捕獲頭数は県全体で五千三百六十頭と過去最高を記録していますが、生息数の増加に捕獲が追いつかない状況です。

### 2 埼玉県が主催する捕獲従事者研修

(1)アライグマ防除に関する法律等について

- ・(講師) 埼玉県中央環境管理事務所
- ・関係法令(鳥獣保護管理法(許可捕獲と狩猟、外来生物法))
- ・埼玉県アライグマ防除実施計画
- ・県内及び中央環境管理事務所管内のアライグマ捕獲状況

(2)アライグマの生息及びびわなの使い方に関する講義(講師 古屋部長)  
アライグマの生息

- ・総合的被害防止対策
- ・捕獲のポイントやその注意点等
- ・【講義内容の抜粋】
- ・効果的な対策を実施するには、

- ① 相手を知る!
- ② 餌となるものを放置しない!
- ③ 生息場所、繁殖場所をつくらない!
- ④ 特性を生かした有効な柵を設置する
- ⑤ 個体数を減らすための計画的な捕獲を実施する!

アライグマは生息数ゼロを目指す。被害が出ていなくとも捕獲体制を整備する。

アライグマは横移動するので近隣市町村と連携し面で捕獲圧をかける。増加の手助けをしているのは人間一般住民にも理解してもらおう必要。捕獲従事者を整備する。

(人任せにしない意識の徹底) 捕獲後の処理体制を整備する。(個人、担当任せでは限界がくる) アライグマは何故減らないか?

① 増加のスピード(食べ物が豊富、安心安全な生息環境)

② 捕獲の方法(捕獲時期、生息地点と捕獲地点のズレ、捕り残し)

捕獲時期は妊娠期間(1～3月)や出産直後(4月頃)が効果的だが、この時期に捕獲圧が掛かっている捕り残しがないように同じ場所に複数のワナを設置し、群れの個体を全て捕獲する。

### 3 埼玉県川越市のアライグマ対策の取組

川越市では、「鳥獣被害防止計画」を作成し、アライグマ、ハクビシン、タヌキの対策を実施しています。平成27年5月に行政(県、市)、関係機関(JAいるま野、農業委員会、農業共済組合)で構成する川越市鳥獣被害防止対策協議会を設立し、年3回アライグマ捕獲従事者研修会や電気柵設置講習会を開催しています。

鳥獣交付金で箱ワナを整備し、捕獲従事者への貸し出しを実施。捕獲従事者1人に対し、同時期に3基まで貸し出しを行っています。

捕獲従事者の利便性を考慮し、JAいるま野と連携し、支店等3ヶ所で箱ワナの貸し出しを行っています。(箱ワナ貸し出し業務をJAが実施)



箱ワナによる捕獲方法の説明  
(埼玉県中央環境管理事務所)

- ・捕獲個体は専門の業者に処理を委託。処理費用は1頭当たり3万円。

(土日祝日は対応できないため、金、土、祝日  
前日は箱ワナを設置しない)

- ・平成30年の捕獲実績は74頭。毎年70頭程度捕獲しており、農政部局とは別に環境部局で対応した捕獲数が百十頭程度となっております。

#### 4 所感



川越市アライグマ捕獲従事者養成研修会

埼玉県及び同県川越市のアライグマ防除の対応状況や捕獲従事者育成の手法等について学ぶことができました。特に川越市では、防除体制において、県、市、JA等関係機関の連携が取られており非常に参考になりました。しかし、年間捕獲数が5千頭を超えてもなお、生息域の拡大や生息数が増加しており、県、市町村ともに多額の予算で対応するなど大変苦慮している様子も伺え、初期段階からの対策の重要性を再認識しました。

本県のアライグマは、これまでくりわなによる雄個体の捕獲事例が5頭のみで、今のところ農業や住居被害の報告はないが、北部九州では既に大きな被害が発生していることから、本県への侵入を警戒しつつ、今後は捕獲従事者講習会を通じて県内で同じ認識のもとに、アライグマ確認時には、防除実施計画に基づく捕獲を速やかに行う体制づくりが必要と考えます。

#### 農試内に鳥獣センター展示ほ場を開設

今年度より旧肥飼料検査センターテニスコート跡地に、鳥獣センター独自の展示ほ場を設置しました。

目的は各種鳥獣被害対策技術の展示と併せて、井上雅央氏が提唱されている「鳥獣害に強い畑づくり」をテーマに作物の栽培技術展示を行うこととしました。

展示ほ場内は東側を野菜エリア、西側を果樹エリアとし、野菜エリアではサル等の好まないトウガラシ、シソ、オクラを外側に、スイートコーン、カンショ、ナス、スイカの主品目を内部に配置しています。スイカは1mの高さに玉の受け棚を設けた立体栽培とし、ネットを架けることによって鳥類から守りやすくとともにほ場の効率的な利用を図っています。



スイカの立体栽培



カキの底面ネット栽培

果樹エリアには、カキ4品種、温州みかん3品種、中晩柑類4品種を栽培しています。カキについては慣行栽培の開心自然形ではなく、作業性の良さとして併せて防鳥網の設置が容易にできる奈良方式底面ネット栽培とされています。

両エリアの鳥獣対策のための電気柵として野菜エリアにはアナグマ・タヌキ等の中小型獣対策の「楽落くん」、果樹エリアにはシカ・イノシシを主体とした「電落くん2号」を設置しております。

展示ほ場については、鳥獣センターが主催する研修会等の実習場所として活用していく予定です。春夏作についてはカンショ、ナスを除いておおむね8月末には作が終了する見込みです。その後、秋冬作の準備に取りかかる予定です。



楽落くん



電落くん2号

#### 被害対策に関する問合せ

西臼杵支庁及び各農林振興局  
各市町村・各農協・各森林組合等

# ☆鳥獣被害対策地域特命チームだより☆

## 西臼杵地域



五ヶ瀬町で導入した「グレーチング」

鳥獣侵入防止グレーチングの現地検討会を実施（7月5日）  
五ヶ瀬町桑野内の下赤谷集落が、H30年度鳥獣被害防止総合対策交付金を活用して導入したシカ、イノシシ侵入防止のためのグレーチングについて、特命チームと鳥獣被害対策支援センターで現地検討会を行いました。これまでに設置してきた金網柵で封鎖できていなかった集落内の道路2ヶ所にグレーチングを設置することで、侵入防止効果を狙っています。



道の駅青雲橋の新メニュー「しし丼」

好評  
ジビエを活用した「しし丼」が  
日之影町岩井川の大人集落では、大人ジビエ振興協議会が、H30年度鳥獣被害防止総合対策交付金及び持続可能な地域づくり応援事業を活用し、シカ、イノシシの食肉処理施設を整備しました。  
この施設で処理された食肉を  
利用した「しし丼」が道の駅青雲橋のリニューアルに合わせてレストランのメニューに追加されています。1日20食限定で提供されています。丁寧に処理された肉は臭みが少なく、お客さんの評判も上々です。  
今後とも鳥獣被害の軽減とジビエの利用拡大に向けて、特命チームが役割を果たせるように連携して取り組んでいきたいと思えます。

## 中部地域



事前研修会「みんなで勉強」の開催

宮崎市下古城地区では、昨年  
からイノシシによる水稲の被害  
がはじめており、鳥獣被害防止  
総合対策交付金を活用して電気  
柵の導入を検討していました。  
中部地域特命チームでは、こ  
れまで、防護柵を設置するとき  
は、地域住民の鳥獣被害に対す  
る正しい知識の習得と地域全体  
で鳥獣被害対策に取り組む環  
境作りが大切であることを指導  
してきました。今回の事業導入に  
当たっても、これまで井上スベ  
シャリストが繰り返し提唱して  
きた第一ステップである「みん  
なで勉強」として、平成30年  
6月に地域住民に対する導入前  
研修会を開催しました。



防護柵設置場所の確認

研修会では、まず、鳥獣被害  
の現状と、集落全体で行う必要  
性、被害誘発の原因が集落側にもあることを住民に理解してもらいました。  
次に、防護柵を設置する際のポイントや省力的な管理が可能となるルート等について、説明を行いました。  
集落の人々も説明内容に熱心に頷く等、鳥獣被害対策への関心の高さがうかがえました。  
平成31年2月には、次年度の事業実施に向けて集落代表者3名と柵の設置予定ほ場の調査を行い、設置位置や方法についての検討を行いました。  
当初計画していた導線が水路をまたいでいたり、林野沿いで侵入防止効果が見込めないなどの問題点を洗い出し、適切な設置に向けた指導を行いました。